柳田国男と橋浦泰雄

――日本民俗学の一系譜――

鶴見太郎

第一章　「橋をかけるような気持」――一九四六年の柳田国男

一九四七年一月の『展望』で柳田国男は中野重治と「文学・学問・政治」というタイトルで対談を行っている。対談内容は俳諧から祭、家制度と多岐にわたるが、その終わりの部分でおのずから二人の話題は戦後の日本人の取るべき政治的態度へと進んでいく。

柳田―白状すれば、まだ期待しなければならない徴候を見せていないんで私は心細いんです。どうも全体に、新聞が同情して書いている記事をみても、まず破壊というような態度になって、建設的な意図がちっともあらわれていない。だからユートピアでもいいから、こうなるのだという夢の材料を、もう少しわれわれのような年をとって想像力でもって将来の日本のことを考えてる者に、安心のできるようなプランを示さなければならない。

中野―共産党では、ということになりますが、日本の平和革命のパースペクティブを早く発表したい。つまり平和手段で日本の民主的革命が実現されるのだということを共産党が言って、そうかも知れんなと一般の人がある程度まで思ったという所で止まっている。それじゃ平和革命は実際どういう手続きで、議会はどうなるのだ、またこれしか道はないんだという具体的な見透し、それを一時も早く作り上げて発表しなければならんところに来ているようです（『柳田国男対談集』　筑摩書房　一九六四年　一五三頁）

少なくとも、ここで両者にとって気がかりだったのは、内省を

欠いたままアメリカ民主主義にせよ、共産主義であるにせよ、外からの力に無防備な形で呼応、妄動する当時の多くの日本人の姿だったのではないか。

まず眼前の生活を改善していくこと、しかもそれは絶えず内省を含み、現実に即して民間から行われねばならないこと――この点に於いて二人の立場は、ほぼ同一線上にある。同じ対談の中で柳田は「今われわれが気づかっているのは、給与の増額ではなくして、増額された給与がどうつかわれているかということなんです」（前掲書　一五六頁）とも言っている。こうした冷めた視野は中野の方にも共通して存在する。それはこの対談が行われた一九四六年十一月①に恐らく執筆中だったと思われる「五勺の酒」（『展望』　一九四七年一月号）の中で、警察署長を父に持っていたことから東大新人会への入会を拒否され、長じて中学校の校長となり、消極的ながらも、時流には一定の距離を保って自らの思考を持続し得た教師の口をかりて、敗戦後、自分の中学にも青年共産主義同盟がやって来るようになり、「少年らが古い権威を鼻であしらうことだけ覚え、彼らの癖になろうとしている事」に危険なものを感じると同時に、その批判を直線的に共産党に向けるのでなく、何故目先の問題の解決を実現させていくことから党活動を始めないのか、と説く抑制のきいた現実的な姿勢からもうかがえる。中野は続いて「五勺の酒」の中で次の如く述べる。

また電気労働者のなかの共産党員は、なぜ、変圧器をどしどし修繕して、ふやして、電球、電熱器を配って、駅や藪の下や焼跡の要所に街灯をつけて、農村へ電気を引いて、それで電動もみすり器をひろめて、その費用を政府もち資本家もちとして、争議が解決しても、ふやした街灯、農山村の電気はそのままにすることにして、そこで争議になったら日本があかるくなったというようにするよう組合を動かさなかったのだろう。

もう一度、先程の対談に戻ると、柳田は中野に対して次のように語りかける。

柳田―だからわれわれみたいな者とも考えを交換してみなくちゃだめですよ。（中略）中野君のような新しい世界に働いている人たちとお交際いしたいとおもうが、なるべくならば橋をかけるような気持になってください、われわれの方との間の。いずれその中間のものができますよ。こっちの要求したものでもない、あなたの方の要求したものでもない、中間のものがね。真面目な者はみな苦しんでいるんです（前掲書一五七―八頁　傍点引用者）。

無論ここで柳田は中野を当時の日本共産党の全体像として、短

絡的に受け止めているのではない。事実、柳田はこの対談の最後を「実際、あまり親しくわれわれと話してると、こっちにきてしまうとたいへんだからね」（前掲書　一五八頁）と結んで、自らの保守としての立場を崩してはいない。しかしここで柳田は明らかに、中野に対して自分の方から接点を見つけようと歩み寄っている。翌四七年四月二三日付の『アカハタ』に、当時枢密顧問官を務めていた柳田が第一回参議院選挙に際して、「私は共産党に投票する」と題する一文を寄せ、日本共産党より立候補した中野を支持したのも、これと無縁ではない。

敗戦直後の一九四六年、柳田によって表明された「橋をかけるような気持」とは何なのだろうか。これはただ単に、当時七一歳だった柳田の危機意識が昂じて飛び出した言葉として見ることはできない。恐らくこのような発言をするに到った柳田の脳裏には、過去二〇年にわたって自分に師事してきた共産主義者・橋浦泰雄（一八八八―一九七九）のことが去来していたに違いない。

既に多くの指摘を受けていることだが、柳田国男と交流のあった人物の中には中野も含めて特に一九三〇年代以降、少なからずマルキシストが入っており、同時にその交流は柳田民俗学に触れるという形で行われた。その形態は戦中の志賀義雄、福本和夫の如く獄中で柳田の著書をひもとくというものから、直接指導を受けた大間知篤三、石田英一郎まで幅広い。この事は中野重治によって形容される「弱ったとき、心が病んだときに柳田民俗学というのは癒してくれる、まさに鹿の湯のような」[2]という言葉が示す如く、柳田民俗学のふところの深さを表す一つの証左となる訳だが、またそこには柳田が創出し、自らの研究対象でもあった「常民」を、これらマルキシストたちが「無産階級」という言葉に置き換えることで、自身の洞察を深めようとした側面もあった。その中にあって橋浦泰雄は、最も早く柳田の知遇を得たマルキストであり、そして柳田の没するまで、緊密な連絡を保ち続けた民俗学者として知られる。

実際、中野が柳田の仕事を自分が知ったのは、「多分、橋浦泰雄や大間知篤三に教えられてだったろうと思う」（後藤総一郎編『人と思想・柳田国男』　三一書房　一九七二年　一〇三頁）と言っているように、弾圧下のマルキストたちが柳田民俗学に接する時、橋浦は両者の仲立ちを果たす立場にあった。[3]

こうした橋浦の位置を神島二郎氏は、「（マルキストと柳田民俗学の）フィルターの特異性という点で注目される」（神島二郎編『柳田国男研究』　筑摩書房　一九七三年　五頁）と規定している。[4]だが、先程の一九四六年に柳田が中野と共に分かち合った感覚を目のあたりにする時、柳田にとって、そして中野にとって

橋浦泰雄とは、もはや単なるフィルターではなく、独立した位置を占める存在になってくるのである。

〔付記　引用文中の旧漢字は適宜、当用漢字に改めた。〕

① 後藤総一郎編『柳田国男伝』別冊年譜（三一書房　一九八八年　以下、『柳田国男伝』と略す）では、この対談の行われたのは一一月一四日とある。

② 「昭和思想――過渡期人物による試み」（谷川健一、後藤総一郎の対談による所引）『現代の眼』一九七二年一月号

③ 一九七五年七月に上梓された中野の交友録『わが国　わが国びと』（新潮社）には数箇所に分散して橋浦のことが記されている。その内もっとも古いのは、中野が入党する以前の一九二九年四月に急逝した全日本無産者芸術連盟（ナップ）の機関誌『戦旗』編集長・佐藤武夫の葬儀で弔辞を読む橋浦の姿である（六九頁）。更に中野が柳田と初めて会ったのは一九三八年、橋浦の満五〇歳の会に於いてであった（六七頁）。

④ その他、竹村民郎氏の「柳田民俗学の軌跡」（『日本史研究』一九六二年一一月）は、橋浦が民俗学を学んだ契機が民衆の「共産主義は外来思想である」との誤解を矯正することを背景とした所から、その学風が「実践的にならざるをえ」ず、これがやがて「一九三〇年代における抵抗の組織、思想形成のための一つの試み」となったと評価すると共に、そうした「橋浦の学問」が挫折していったと位置付けている。小論では戦後の橋浦の動静を含め、その民俗学が必ずしも挫折とは言いきれない部分があることに主眼を置く。この点で小論で使う「実践的」という言葉は上述論文と性格を異にする。

第二章　橋浦泰雄の民俗学

第一節　郷里での思想形成

柳田の門下生の中にあって、橋浦は自身のことを語る時、比較的饒舌な方である。勿論これは九一歳で没する一九七九年まで共産党員、画家、そして民俗学者として活動し、柳田の高弟である以外に、柳田から独立した社会運動家として明記される部分のあったこと、そして柳田に出会う以前の青年期を扱った自伝『五塵録』が死後、刊行されていることを考慮に入れてのことだが、同時に彼の饒舌さは決して誇張に走ることのない、むしろ淡々とした控え目な言葉が続いていくという点に於いて一貫している。この橋浦の筆調は『五塵録』の中に描かれている彼の故郷、鳥取県岩井郡大岩村の情景、そしてその幼年時代の回想にも共通しており、自身の家族・親族に言及する際にも屈折したものは感じられない。

橋浦家自体は橋浦の父の時、大岩村で祖父の始めた酒造業から雑貨商に転じ、加えて養蚕を兼業し、同村では六番目の地主でもあった。橋浦自身は十人兄弟の六番目であるが、三年下の弟・時雄は早くから『平民新聞』を通じて社会主義者となり、後述する

ように大逆事件の余波による投獄体験を持ち、更に一九二二年には日本共産党の創立に際して、執行委員の一人として参画した人物で、六年下の季雄は東北帝大農科大学、すなわちもとの札幌農学校で有島武郎に師事し、後に橋浦はこの季雄を介して有島と知り合うことになる。[1] 後年、季雄は渡米しカリフォルニアで牧場を経営するが、第二次世界大戦で消息を絶つ。この様な〝外への志向〟を伴った生き方は、北海道に渡って実業を始めた三男の義雄や、大岩村村長を辞任した後、鳥取県海外協会を率いてブラジルに移住し、百歳という長寿を開拓に捧げた次男の昌雄にも共通している（橋浦時雄　『冬の時代から―橋浦時雄日記第一巻　一九〇八～一八』　雁思社　一九八三年　六〇九頁　以下『時雄日記』と略す）。

こうした兄弟の中にあって、橋浦は小さい頃から「ついぞ他家に行って遊んだことは一度もなかった」（橋浦泰雄　『五塵録』　創樹社　一九八二年　六九頁）し「少なくとも三年生ごろまで学校で自分から進んで他人に口をきいた覚えはない」（前掲書　一五頁）といった内気な性格であった。生来の内向性に加えて、感受性の鋭敏だった橋浦が少年時に体験した記憶すべき事件として掲げているのが、七歳の時、家の奉公人に散髪をしてもらっていた際、「ぽつんと『あんたら殻つぶしだけんな……』とつぶやくような小声で言い聞かせ」（前掲書　二三頁）られた事と、同じくそれから二年後、やはり家に出入りしていた運送業者の一人から、「何かの話の続きに『あんたら米の虫だけんな』」（前掲書　二〇頁）と言われた事である。

この、階級格差の原体験とも言うべきものを橋浦は「私が恥じねばならぬことをいったのだろうと、おぼろげながら、しかし強く心を刺して終生私の行動を支配する端緒となった」（前掲書　二〇頁）としている。この様な一つひとつの体験を重視する橋浦の経験主義的な思考形式は、その後の彼の社会主義運動を特徴づける基盤の一つとなったし、更に後になって柳田のもとで民俗調査を行う際にも活用されることになる。

橋浦家に関して立ちもどると、一九一〇年十一月、既に上京して早稲田大学に籍を置いていた時雄が大逆事件の判決に対して『因伯時報』に抗議文を送り、それが掲載された事で検挙され、翌年新聞紙法違反で四ヵ月、日記の不敬文で五年の判決を受け、その報が郷里の橋浦家に届いた際、父の雄次郎は家族の集まった中で「『心配せんでもええ、悪いのは睦仁だ。時雄はちっとも悪いことをしたわけではない。社会主義の方々もみんな立派な人のようだ』と判決し」た（前掲書　九四頁）。前述の他の兄弟たちの生き方をみても分かるように家の倫理とは何処かで異なった立場

の存在を許す気風がこの家にはあった。このことは後年、橋浦が自分の家族から伝え聞いた故郷の伝説、習俗を紹介している点にもあらわれている。

この様の家の性格とは別に、橋浦が文献を通して社会思想に接するのは時雄の示唆による所が大きい。橋浦自身は高小卒業後、予定としては師範学校を受験する予定だったが、余り気の進むものではなかったらしく、希望していた美術学校への進学も容れられぬまま、家業を手伝うかたわら、読書や短歌作りにふけっていた（『時雄日記』　六三四頁）。既に一九〇四年の『平民新聞』の日露戦争弾劾記事を目にして社会主義には接してはいたが、それが本格的になるのは、一九〇七年夏、鳥取一中在学中だった時雄が帰省して大岩村の有志と共に作った読書会に誘われたのを契機とする。その時講読した文献は堺利彦の『社会主義研究』第一号所収の「共産党宣言」（幸徳・堺共訳）、「マルクス伝」（リープクネヒト）、「エンゲルス伝」（カウツキー）などであった（『時雄日記』　六三四頁）。

しかしその後の橋浦の民俗学への足がかりとなる点で、どうしても取り上げなくてはならないのが、それよりやや遅れて読んだクロポトキンの『相互扶助論』であろう。この著書のなかでクロポトキンはロシア地理学協会の一員として、一八六二年から六七年の間、シベリアにあって、辺境守備隊の軍務のかたわら同地に生育する動植物の生態はもとより、少数民族の生活・慣習への詳細な実地観察を経て、ダーウィニズムの根幹である「『同一種に属する動植物間の』生存方法の為の激烈な闘争と云ふ事」（『相互扶助論』大杉栄訳　春陽堂　一九二二年　二頁）が、「私も熱心に探し求めたのではあるが、ついに見出されなかった事」（前掲書三頁）から、「団結と相互扶助とは哺乳類の規則である」（前掲書七〇頁）と決定づける。橋浦の初期の民俗調査が相互扶助に凝集していく基盤はここにある。青年期、ロンドンにクロポトキンを訪れた体験を持ち、晩年狩内農場を解放した有島との親和力もこれと無関係ではない。もうひとつ、クロポトキンの行った地域調査で付け加えるならば、農・漁民の生活向上という目的を持っていた点であろう。それは彼の自伝『ある革命家の手記』の中で、シベリアから帰還後の一八七一年に同じ地理学協会会員として行った、フィンランド農民の生活調査に明確に打ち出される。

私がフィンランド農民たちが土地を平らにし、かたい粘土質の丸石を砕くのに大変な努力をはらっているのを目撃したとき、自分自身に言いきかせたものだ。「私はロシアのこの地方の自然地理を書いて、土を耕すのにいちばんいい方法を農民たちに教えてやろう。ここではアメリカ製の切り株引き

抜き機が役に立つだろうし、あそこでは科学的な施肥法をやらせてみよう」(『ある革命家の手記』高杉一郎訳　岩波文庫　一九七九年　二二頁)。

だが、疲弊したフィンランド農民の姿を目の前にして、クロポトキンはこの〝上から与える改良案〟を次のような宣言とともに撤回する。

しかし、今年の収穫まで食いつなぐだけのパンもろくにないというのに土壌をよくすればよくするほど粘土質の丸石の土地のために払う地代が高くなっているというのに、農民にアメリカ製の機械の話をしたところでいったいなにになるだろうか。(中略)彼が求めていることは、私が彼と生活をともにして、彼があの土地の持ち主か自由な使用者になれるように援助してやることだ(前掲書　二三頁)。

この後展開されるクロポトキンの無政府主義運動への挺身は、実はその前段階として民衆の生活改善への眼差しを含んだ地域調査を通っているのである。こうしたクロポトキンの経緯はやがて一九二五年、原始共産制の痕跡を求めて青森・下北半島の突端にある尻屋村を訪れた橋浦の姿と重なってくる。後に橋浦は次のように回想する。

わたくしが『平民新聞』によって社会主義への目をひらかれたことはさきほどお話ししましたが、もう一つ尻屋への関心を強くしたのは、大正の初期にクロポトキンの『相合扶助論』の前半部の翻訳を読んでいたことです。(中略)私は弟(時雄のこと――引用者注)からその扶助論をもらって読んでいたのです(「柳田国男との出会い」『季刊・柳田国男研究』〔第二号〕　以下「柳田国男との出会い」と略す)。

地域調査による実体験を通したクロポトキンの思想と、自身の郷里の〝家〟との連続性――これが民俗学者・橋浦泰雄の出発となり、それはその後の民俗調査との関わりに於いて、共産主義者としての橋浦の思想基盤を特異なものとすることになる。

第二節　尻屋紀行――柳田以前

もともと下地があったとはいえ、橋浦が民俗学を志すのは三〇代半ばを過ぎてからであり、むしろ晩学に属する。『五塵録』に述べられているその間の橋浦の足跡は、後述の社会主義運動の他に白井喬二をはじめとする同郷の文学好きの仲間との数種にわたる同人誌発行、大学講義録の出版など、自由奔放なものである。これらの刊行事業は短期で断念を余儀なくされるが、こうした活動と並行して独学による日本画の研鑽も怠らなかった。

そんな中で一九二五年は橋浦にとって、その後の民俗学者とし

ての決定的な方向をもたらした年である。一昨年前の一九二三年は情死した有島の火葬に立ち合い、更に十二月十六日には大杉栄の告別式に出席するなど、橋浦にとっては身近な人々が去って行った時期であった。そしてやはり同じ一九二三年、先に述べた札幌にて牛肉店を営んでいた兄・義雄の細君が急死し、家の面倒を頼まれたため、当時の橋浦は断続的に北海道に渡っていたが、二五年の一月、岩内で有島と知遇があり、『生まれいずる悩み』のモデルともなった木田金次郎から、尻屋村に現存する原始共産制について聞かされる（「柳田国男との出会い」）。そして画家としての景観的な興味も手伝って、同年の五月、尻屋村を訪れる。

これが橋浦の行った初めての地域調査、ひいては民俗調査となる訳だが、この時まだ橋浦は柳田国男の存在を知らない。言わば全く一人の共産主義者として、尻屋村の持っている〝原始共産制下の共同生活〟に魅せられて赴いたのであって、この点で彼の採集対象は限定され、また、既に検挙歴（第五節参照）のある共産主義者としての気負いもはたらいてくる。尻屋村での記録は一九二六年の一月から二月にかけて『同愛』に掲載され、その中で橋浦は同村の「小学校を卒業した位の少年少女等から六、七十歳以上の老人迄一切全村挙つて出動し、各々その力量に応じて所有の労働を分担する。そしてこの所得は老壮幼若男女の区別なく一切同等に分配される」ことや、「種牡牛馬は村有であるが、これは必要に応じて無料で使用出来る」（「尻屋村」『同愛』一九二六年三日号）ことを紹介し、「おお尻屋よ！　お前の姿はよしやまだ完全ではないとしても（中略）同じく地上に住む我々にとつて実に大きく力強いところの、そして夢ではなくて現実に生きているところの力であらねばならぬ」（前掲稿）という感動とともに、この報告をしめくくる。

他方、こうした橋浦の感情的な調査態度は、特にインフォーマント個人に対してマイナスの方向にもあらわれてくる。

同氏（村役場出張所書記――引用者注）はその地位上からの不安からでもあるか、本村は共産制治下の村落として宣伝される事を厭ふらしく、『本村は共産村として世間の評判になつてゐますけれど、実は旧式な村の風習がそのまま残つているだけの事で、例の大杉さんなどの過激な共産主義者とは全然違ふのですから……』と再三弁疏的に附言された。O君をコンミュニストと感違ひしてゐるのは不便な土地の事とて些細な誤謬にしかすぎぬとしても、自村の制度を単に古い風習の一つとして片付け、その制度の根本本義に触れる事を恐れてゐらるる如くに感じられたのは心細い事であつた（「尻屋村」『同愛』一九二六年二月号）。

主体である人間の思想的な自覚がなく、無意識のうちに慣習として残り、伝承されていくもの――これこそ正に民俗学の採集対象とするものなのであって、その意味で、ここで出てくる書記の対応は妥当なものである。これに対して憤りを感じている橋浦には、まだ後年の〝採集の達人〟としての面影はない。しかし、まず〝原始共産制の発掘〟という形での橋浦の民俗学への関与の端緒となった点で、尻屋村は重要な意味を持つ。

尻屋から帰った橋浦は、既に交流のあった堺利彦の所に行き、日本に残された原始共産制研究の関心が自身の内で高まっていることを告げる（「首途のその頃」『ひだびと』一九三六年四月号）。堺はその研究を奨励すると共に、「婦人が非常に蔑視されているから、ついでに婦人の問題も少し調べてきてくれ」（「柳田国男との出会い」）と付け加え、柳田国男を訪問することを勧める。そして同じ年の九月、橋浦はいよいよ柳田を訪れることになる。

第三節　対象の拡散――民俗学者・橋浦泰雄の誕生

一九二五年九月五日、柳田は東京美術学校を会場にして「南島研究の現状」と題する講演を行っていた（後藤総一郎編『柳田国男伝』別冊年譜　三一書房）が、その講演の前に橋浦の訪問を受ける。この紹介状を持たない来訪者を柳田は講演終了後、自宅に誘い、この時二人の間に交わされた会話が、橋浦の柳田から受けた指導の最初のものとなるのだが、橋浦が前述のように原始共産制を残した村落研究の抱負を語ったところ、柳田は次のような注意と指示を与えた。

研究の目標の一つの事柄に重点は置かれるのは当然だが、といってその目的を自制の埒の中に固定させて、その埒内をいくら掘り返して見ても正しい成果を得るとは限らない。村々の集団生活というものはいつでも総合的に行われているもので、決して一つの事柄が単純に他と関係なく行われているのではない。だから共同制度の資料の募集としても、その制度の周辺の問題、資料をできるだけ集めてきてほしいということでした（「柳田国男との出会い」）。

ここには二つの問題が内包されている。すなわち一つは単純に調査の効率という観点に立って、採集者である橋浦が当面の研究対象である〝原始共産制〟に関する情報を、インフォーマントから引き出す手段として、「周辺の問題、資料」を集めるという点であり、もう一方は純粋に民俗学の立場から、無意識に行われている生活習俗を限定された表象の枠内のみで捉えずに、総合的に調査を行うという点である。恐らくこの時点で、橋浦はまだ前者の側に比重を置いて、これも原始共産制の残存していると思われ

る僻村として柳田から教えられた地域を約三ヵ月、全行程徒歩で調査する。[2] 橋浦にとっては研鑽の時期が始まる。

この時の記録は有島の個人雑誌として出発し、その死後、有島の知人たちによって引き継がれた『泉』にスケッチ風に綴られているが、「骨肉相食む現代の資本主義文化に毒されないで、全く字義通りな自由と平等と博愛とに包まれ結ばれた共産共栄の理想郷が何処かにこつそりとかくされてはゐはしまいか？」（「理想郷を訪ねて」『泉』一九二五年十月号）と始まるこの採集記録は、依然として共産主義者としての橋浦のこだわりがかいま見える。

……愈々今日（十月二七日――引用者注）は東北の旅へと出発。先ず高崎へ下車して安中付近の理想郷と言ふのを探したが、それは単に不成績な清浦時代の産業組合が誤伝されたもので失望した[3]（「理想郷を訪ねて」『泉』一九二六年一月号）。県庁所在地の福島へは四日路、水田が無い為め、現在でも粟稗を常食としてゐるほどの山村であるが、浮世の波は既に打ち寄せてゐて、目的の共栄制度は甚だ貧弱にしか残つてゐなかつた（前掲稿）。

しかし、この時の採集録のうち、橋浦が特に稿を改めて、翌年三月発表した「陸前気仙郡海岸[4]」は、同地で聴きとった諺だけを主観抜きに並べたもので、柳田の言う「周辺」の資料が採集されたそのままの形で登場する。そして同じ年の八月に発表された「互助共産村百瀬川[5]」（『解放』一九二六年八月号）では、題名が示す通り、あくまで目標とする対象は原始共産制ながら、橋浦の眼は、それに付随して生ずる事象を丹念に追う。例えば一つのプロセスとして、まず一家族内の家事が全て合議制で決定されることから出発し、分家の時は必ず相応の財産が分配されることを掲げ、その際、新しく家屋を立てる場合の共有林からの協同労働による伐採、建築やそれに対する謝礼、およびそれに伴う行事と進み、それと並行して家屋構造にまで報告が及ぶ。つまりここでは、〃協同の労働〃が状況と目的に応じてその形態を変えつつ行われるという観点から、もはや〃生産と分配〃のみに自らの視野を固定させない、「周辺の問題や資料」との有機的な連関が図られているのである。

この採集記録の終わりの部分は、県当局によって提示された保安林と村政整理のための「現存の立木は一応は部落民に伐採を許可する事、その一部分は部落の各とに分譲する事、伐採後の殖林は当局にて計営し、その幾割かの権利を村に分与する事」という百瀬川村の共有林解体を意図とした布告に対し、村民が「部落共有林は部落民一同の生活の基礎をなしてゐるものであるから、その分譲は一時的且つ個人的見地からは利益の如くに見ゆるが、鰈

て各戸の財産状態に大差を生ぜしめ、引いては部落の和平を阻害する原因となる」として、県当局が計画している利賀村村有林との合併に反対した結果、同共有林が当局によって強引に保安林に編入され、他の大字には許可される伐採が百瀬川村だけに適応されず、出稼ぎという事態の生まれている事が指摘される。そして橋浦は「国家的見地からして保安殖林は勿論重要事であるが」と断りながらも、「明治維新以後、我が国地方町村の互助共産制度を根本的に破壊し尽したその第一導火線であつた事実に徴して、吾々は其処に多大な教訓を発見してゐるものである」と結んでいる。

単なる感傷的な原始共産制の発掘に留まらない、現在目の前に横たわっている問題を見据える姿勢と、自身の関心とは直接関係のない小さな採集事実をも記録として組み入れる学者としての広さが、自分の経験を通じて物事を理解していく生来の橋浦の気質と相いまって、この調査報告を厚みのあるものとしている。

そして明治政府以来続けられてきた、大字を改変する政策が如何に従来の日本の農村に於ける自治機構を破壊していったかを目の当たりにして、これを批判するに到った橋浦の軌跡は、期せずして明治政府の性急な一部の近代化政策への批判を軸とした、柳田の民俗学への取り組み方と一致するのである。しかも、この時の調査に先立って柳田は橋浦に採集に関する注意のみを与えたのであって、橋浦がこの調査で得た確信は全く自発的に起こり、柳田に収斂して行ったのである。

一九二六年以降、橋浦の取り上げる民俗学的題材は、長野県に散在する道祖神[6]、雨乞の祈禱形態（「雨乞（東筑摩郡中山村）」『郷土』一九三一年十一月号）、産石（「出産と石と」『郷土』一九三二年七月号）といった具合に拡散、細分化されていく。広がっていく関心対象と経験的な視野――更にそれらは今までの橋浦にとっての課題であった協同労働と相互扶助を絶えず顧みながら調査を行うという構造を持っているのである。民俗学者としての橋浦泰雄の全体像が、ほぼここに定まったと言えるだろう。

第四節　「総論」から学ぶ――山村調査、その他

前節に於いてお互い意図としない所で生まれることとなった柳田と橋浦の一致は、政治的要素の介入し得ない、有るがままの採集結果から出てきたものであり、それは単項目だけの調査に固執することなく、生活全般を見渡して、仮に各々の採集された事実の間に繋がりが無かった場合、その相関関係の追求を敢えて行わずに、採集されたそのままの状態に留めておくという民俗学の性格によって裏打ちされる。もし特定の採集事項を或る目的にした

がって抽出しても、それは総合的な調査を念頭に置いた研究者の姿勢から繰り出されたものであって、本来の研究対象である日々の生活が持っている均衡と調和を崩すことはない。

こうした生活の諸様相を包括的に捉えた記録を、柳田は「総論」と呼んでいる。[7] 橋浦自身は柳田の言う「総論」への自分なりの解釈を後年、次のように言っている。

先生は早くから「総論」を書けとすすめられた。体系というのは、骨格に肉付けをして一人前の人が成り立つようなものでしょうが、先生の総論というのもそれが完全なものなら、そういった体系と違ったものではないといえましょうが、しかしこの方には完全に至るまでのいくらかの余裕が含まれています。体系となると、一脈の固定概念に従って、すべての事物をその尺度に従属せしめて結論する。[8]

その後の橋浦の調査は、やはり村落内の共同所有、協同労働に重点を置いたものとなるが、柳田がマルキシストの橋浦に対して寄せた信頼は、この様に彼が「総論」の意味を理解していた事にある。それを踏まえて橋浦が取り上げる「共同所有、協同労働」は、自ずと観念的な定義用語に縛られることのない柔軟なものとなる。一九三一年一月に刊行された『明治大正史・世相篇』の中で、執筆中体調を崩した柳田が、特に橋浦を指名して第十一章の「労力の配賦」を書くことを要請したのは、何より柳田が「総論」理解の上にたって、自身の主題を考える橋浦の態度を認めていたことを抜きにしては考えられない。[9]

もう一つ、柳田と橋浦が互いに引き寄せられた理由として掲げなくてはならないのが、橋浦の調査を行う際に見せる〝現在との連結〟であろう。既に百瀬川村の共有林に於いて発せられた、橋浦の〝崩れゆく農村の自治機構〟の指摘は、この地域研究に、ただの採集報告だけではない、現在の問題を掘り起こすという実践的な性格を与えている。しかもそれは決して階級的な価値判断を混在させたものではない。

一九二七年に岡正雄、折口信夫らによって、より洗練された学問としての民俗学を確立することを指標とした「民俗学会」が設立され、それを時期尚早として反対の立場をとった柳田の周囲から多数の研究者が同学会に吸収されていった中で、橋浦がほとんど一人だけ柳田の下に残ったのは、民俗学が自分を引き寄せる二つの磁場、すなわち思想的立場以前の段階に敢えて留まる採集資料の堆積としての「総論」と、目の前の問題を見極めることで民衆の生活改善の処方箋を探るという、その実践性を尊重したからではないか。

……二、三度集会（民俗学会のこと――引用者注）に参加

しているうちに、会員の協議に対する態度が頗るジャーナリスティックであること、それよりも民俗学に対する目的の上で、この方は学問のための学問、研究のための研究、よくいって象牙の塔で、先生のいわゆる、基点とは大きな相違があることに気づきました。（中略）もちろん先生の「人民のための学問」という基本が正しいと確認した上でのことですが、わたしは直ちに新学会を退会しました（「柳田国男との出会い」）。

この時の橋浦の胸中には、早急に構築された体系としての民俗学には、マルキシストとしての自分の求めるものは無いという、意識せざる拒否感覚が作用していたのかもしれない。そして、一九三四年から三九年にかけて木曜会――やがてこの木曜会が「民間伝承の会」となる――によっておこなわれた全国山村調査、並びに海村調査に於いて、橋浦が柳田の民俗学に引き寄せられた〝二つの磁場〟は、更に明確な形で発揮されることになる。

「今日古風と謂はれている村人の生活様式の中から日本人の精神生活の根源を探り出す⑩」ことを主眼としたこの調査計画は、「一府県一箇所以上、互ひに若干の距離を有して隔離され、且つ比較的交通機関に恵まれず、所謂世間との往来の制限せられたる村落」（柳田国男編『山村生活の研究』国書刊行会　一九七五年五四九頁）を対象とし、あらかじめ柳田によって作製された百項目の質問⑪から成る「採集手帖」を携帯した調査員が原則として一人で調査地に赴くという形式を採り、柳田にとっては、木曜会で指導してきた門人を通して、今まで自分にとって捉え難かった「村が一個の有機体として命長く生きてきた生理⑫」を明らかにしようという心算があった。

調査員は、大間知篤三、宮本常一、倉田一郎の他二〇名以上にのぼるが⑬、その中にあって橋浦は最年長であると共に、過去一〇年に及ぶ民俗調査の経験を持つ最も採集に熟達した一人だった。その力量は前述の「採集手帖」に凝縮されている。

若手の調査員たちの中には不慣れなことも手伝って、一部の質問事項を空欄にして帰京せねばならなかった例もあったが、橋浦の「採集手帖」は書き漏らしが無いのは勿論のこと、その採集記録は全頁にわたってびっしりと埋め尽くされ、時には欄外に及んでおり、彼の「総論」への意気込みが伝わってくる。そしてこの調査の第一報告書を作製するにあたって、橋浦の担当した項目が、「もやひ」、「ゆひ」（各々〝共同所有〟と〝労力相互交換〟の総称）だった事は、一九二五年の尻屋村以来、橋浦が一貫して追い続けて来た主題が柳田の「総論」の中で捉え直された点で象徴的である。

採集手帖自体に、柳田によって記録には調査員の主観を混入させないようにとの注意が付されていたため、この報告書に於いても橋浦の筆は、あくまで採集事実の紹介という形をとっているが、一九三四年に橋浦が単独で発表した「笑へぬ山」[14]（『旅と伝説』一九三四年十一月号）には、当時の調査に於ける橋浦がとった調査への取り組み方の一端が窺える。同年に行った静岡県周智郡気多村の調査を下地にしたこの文章は、まず柳田の質問事項の一つだった「クセ山」から始まる。折に触れて「賑々しい神楽の音や馬鹿囃子などをきいたり」する同村の字平木にある「じょう山」は古くより村人の禁忌の対象となり、その事は組を作って山仕事を行う時、七人になる事を極力避けたり、やはり組仕事で山に鎌を入れる際、その順序の狂う事を忌むといった多くの不文律を生む。やがて明治二七、八年頃から王子製紙がこの山の伐採権を買い取り、村人の生活は豊かになった反面、かつては自分たちで作った手織木綿、及びその技術や、常食とした粟、稗、かち芋などは全く忘れ去られてしまう。そして大正十三年、木を切り尽くした王子製紙の退去宣言が出された後、村民の直面した悲惨な境遇が描かれる。

山に住みながら、その住むべき山を持たない山村人の淋しさ、苦しさは云ふまでもない。ましてこの責任が此処の村の人々のみにあるわけではなかつた。と同時に、これを時世の不可抗力として、一切を諦観してしまうなら、現実の苦悩に対して之又余りに無責任に過ぎるではあるまいか。クセ山、トシ山の問題の中から、逐次に迷信的要素が活力を失つて行くのは当然のことであろう。然しだからと云つて、さうした問題の中に、古くから成長して来た村生活の基本としての協同生活、自治生活をも喪失して仕舞ふなら、村の生活が此処の村のやうに破滅するのを誰が護つてくれるであらうか。

民間伝承と共に機能としていた村の自治が商業資本によって喰い破られ、崩壊していく縮図が描写されているが、同時にここには、採集を行っている村の現状に自らを置き、過去の協同生活の中から、何か汲み出せるものはないかと考える、民俗学者・橋浦泰雄の姿がある。

第五節　政治の領分

橋浦は民俗学徒であることと共産主義者としての活動の両立を生涯心掛けた。それは戦前に於ける、「学会執務上たびたび迷惑をかけたことはすでにお話しましたが、この場合でも当局による逮捕監禁は、わたくしの社会運動に対する責任に対して行われたもので、わたくしはその責任をのがれんために、累を民俗学、あ

るいは学会におよぼすような言動は決してとらなかった」（「柳田国男との出会い」）というものから、敗戦後の一九四六年、日本美術会の第一会創立準備会にて、議長に推された時、「自分は共産党員だが、それでもよいか、と念をお」（永井潔「弔辞」『鳥取民俗』「橋浦泰雄追悼号」一九七九年十二月号）した所まで、すなわち共産党、共産主義の時代の趨勢に便乗することのない、徹底したものだった。

橋浦の回想だと、柳田自身は一九二五年の初対面の時点で、既に大逆事件の余波で時雄が検挙されているので、「社会主義、共産主義者の中に橋浦と言う奴がいたということは承知して」いたらしい。そして、日本共産党の個々の方針については、その時々に於いて、「赤のやり方は云々……」とよく批判したが、個々人の抱いている思想については何ら干渉しなかった（「柳田国男との出会い」）。

『五塵録』付録の年譜によって共産主義者としての橋浦の活動を俯瞰しておくと――

一九二〇年十二月　日本社会主義同盟の創立大会に参加
一九二一年五月　第二回メーデーにて検挙、約五〇日間監禁
一九二二年五月　第三回メーデーにて再検挙、即日釈放
一九二五年十二月　日本プロレタリア文芸連盟の創立に伴い、美術部長
一九二六年　全国消費組合連盟中央委員
一九二七年　弟・時雄と共に消費組合西郊共働社創立
一九二八年三月　全日本無産者芸術連盟（ナップ）結成に伴い中央委員
一九三〇年十二月　日本共産党入党
一九三一年十一月　日本プロレタリア文化連盟（コップ）創立に参加
一九三二年　日本無産者消費組合連盟結成に伴い常任中央執行委員兼教宣部長
一九四五年十月　日本共産党再建と共に入党

一見して分かるように、柳田と出会い、その指導下で橋浦が民俗学者としての研鑽を積んでいた時期と、その共産主義者としての活動は、ほぼ重なるのであって、前節で見た民俗学者・橋浦泰雄の成長を示す、尻屋、百瀬川の採集記録も実は、この様な活動の合間を縫って行われたものなのである。正に〝政治の領分〟をわきまえた経歴と言えよう。無論、この橋浦の潔癖さは柳田に対しても同様で、それは冒頭で紹介した、戦後柳田が『アカハタ』に寄せた一文に、「私は中野重治氏を通じてしか共産党を知らな

い」（「私は共産党に投票する」『アカハタ』一九四七年四月二三日付）という箇所にも表れている。

だが、小論を執筆していく過程で、一九三〇年の橋浦の共産党入党は正式のものではなかったとの指摘が橋浦の次女にあたる總子氏（現姓・宮澤）によってなされた。[15] 念のため共産党中央委員会に教示を乞うたところ、橋浦の遺骨が分骨埋葬されている、青山の無名戦士の墓に合葬が行われる際に発行された会報に掲載された橋浦の党歴には「一九三〇年入党」という記載はなく、「一九四五年十月　日本共産党入党」（「再入党」とは書かれていない――引用者注）とある事を知らされた。[16]

記録上の党員としてより、本人の社会活動の方が重要なのは勿論だが、以上の事が正しいとすると、橋浦はあくまで一共産主義者として柳田に接していたことになる。その半面、ナップの中央委員を務めていたことへの説明として、總子氏は当時少数精鋭主義の傾向を一部に有していた日本共産党の体質として、一定の人を意図的にシンパの段階に止めて、検挙された際、上部組織へ捜査が延びることへの対策としていた点を挙げられたが、理由は他にも、特にその思想形成期に於いてクロポトキンに傾倒していた橋浦個人の意識の中に存在したのではないか。

橋浦が柳田に師事した時期、アナ・ボル論争の大勢は決し、草創期の日本共産党指導層の一部にあったサンディカリズムの影響を受けた者の数名は離党し、その中にはやがて山川均と共に「労農派」を形成（一九二八年）する時雄も含まれていた。この様な情勢にあって既に柳田に私淑し、経験を堆積していく民俗学の「総論」に引かれ、無理やりひねり出される民俗学体系を批判する眼を持っていた橋浦にとって、コミンテルンの指導下にあった同時代の共産党はどの様に映っただろうか。恐らくは同じ思想を分かち合う組織として支持しながら、どこかで一体化できないものを感じていたのではないか。

その後の潰滅に到る日本共産党の行程に反比例するかの如く、橋浦は一九三五年九月に創刊された雑誌『民間伝承』に全力をそそぐ。大戦下、かつて東大新人会に所属していた大間知篤三や守随一が相次いで満洲に去っていった中、橋浦は自宅を発行所として、四四年八月、空襲激化に伴う休刊まで孤軍奮闘を続ける。この間、橋浦が発表した『民間伝承』の「巻頭言」や、「編集後記」には、彼が体制とは無縁な一つの禁猟区を作ろうとする潜在的な抵抗が底の方に感じられる。

私はこの数十年来我が国に於ける各種の協同労働及び相互扶助の問題について研究してきたが、私の微力故に（中略）究明の歩は遅々として進行せず、ただのろくさと彷徨して居

る。（中略）若し会諸君のうちに此の問題に興味をもたれ、研究に着手されてゐる方があるならば、此の際此の研究課題を、題名そのままに地で行つて、お互いの共有物とし、互いに協力していく方法を組織する事が出来ないだらうか。（中略）従来の横の組織――研究会などは今後もむろん旺んに持つ事として、その一方で、専門課題を中心とした全国的な縦の研究会組織を持ちたい⑰（「縦の研究会組織についての一試案」『民間伝承』一九三七年四月号）。

……然し如何に困難な事態下にあつても斯学隆興の為めには最善の努力を傾倒し、無断で転退するやうな無責任な行動は致しませんから此の点には御安心くださつて、おもむろに諸機構の調整されるのを待つと共に、且つ、その為めに御協力あるよう願ひます（「編集後記」『民間伝承』一九四二年七月号）。

そして既に、翼賛運動の基底に吸い込まれてしまった村の自治組織に関しても、その批判は及んでいく。

我々が我が民族の道徳とその規律とに、最も強く感ずる処のものは、その基本観念が、常に民族としての協同生活に置かれてゐたことである。（中略）然し此の不文伝承は、近年著しく崩壊し始めて、その径路を不明にし、一方悪徳は世にはびこらむとする兆しがある（「道徳と規律」『民間伝承』一九四三年六月号）。

① 有島武郎が一九二〇年六月に叢文閣から著作集第十一巻として上梓した『惜しみなく愛は奪ふ』の終章に「私の発表したこの思想に、最も直接な示唆を与へてくれたのは坂田泰雄氏である。この機会を以て私は君に感謝する」（『有島武郎集』　角川書店　四四三頁　一九八三年）とあるのは当時、坂田家（元鳥取藩士）に婿養子として入籍していた橋浦のことである。

② この時の大まかな足取りは、木曾の薮原から上高地口に到り、野麦峠を越えて飛騨、越中、美濃、朽木村、そして一旦帰京した後、更に群馬、会津、三陸から遠野、大船渡から船で福島に寄り帰京した。

③ 第一次桂内閣時代、農商務相・清浦奎吾のもとで一九〇〇年の産業組合法を運用してその育成が試みられたものの一つと見られる。

④ 『民族』一九二六年三月号。例えば次のようなものがある。「足もとの鳥は逃げる」、「赤い犬は狐を追ふ」、「船の舵より房の舵」

⑤ 百瀬川村は富山県東礪波郡利賀村の大字の一つで、上下二つの群落に分かれており、橋浦の調査は下の部落のみに行われた。

⑥ 橋浦にとって初めて単独で刊行した著作は、この時の写真集『東筑摩郡道祖神図絵』（東京郷土研究社　一九三一年）である。

⑦ 「総論」を柳田が提唱したのは一九一五年一二月二日、新渡部稲造邸で行われた郷土会第三七回例会で「郷土研究に総論の必要になつて来たこと、デレッタントの集合が専門家の代用になりにくいことなど、此会合の為に次第に感ぜられたのも、亦一箇の副産物と見る事ができる」（『柳田国男伝』　四二六頁）と報告した時に始まる。

⑧ 「柳田国男との出会い」。橋浦が「総論」と体系とを対比して捉える考え方は、『民間伝承』（一九四三年十一月号）の巻頭言「日本民俗学

の現段階と方法」に既に表れている。「早く日本民俗学の体系を確立せよと云ふ意見がある。これに対して我々は日本民俗学の体系は欧羅巴的な形式主義を模して架空な体系なるものをつくる必要は無く、内容の充実成長に伴ふて時々刻々に進展的に形成されていくべきものだと考へて居る」。

⑨『柳田国男伝』（七八五頁）。橋浦はこの代筆した章の中で「出稼ぎの動機は村の中の勤播からおこつたものではない。家の協同維持の為に、余つた労力を有効に利用すべく行われたものであつた」（『明治大正史世相篇』　平凡社東洋文庫　一九八四年　二五六頁）、「我国の工業は言はば女の仕事の延長から発達したと云つても過言ではあるまい」（前掲書　二六三頁）と、柳田から見れば勇み足ともとれる記述をしているが、柳田はこれを許している。

⑩『山村生活調査採集手帖趣意書』（未公刊資料、成城大学柳田文庫所蔵）。

⑪　百項目の質問は「村のおこり」、「村の功労者」に始まり、「焼畑作り」、「共有財産」、「村ハチブ」、「女の仕事」、「山の神」、「怖しい響」など信仰伝承に比重を置きつつも、村の生活習俗全般が網羅され、かつインフォーマントから聞き出しやすい言葉で配列されている。

⑫『山村生活調査第一回報告書』（成城大学柳田文庫所蔵）。

⑬『山村生活調査手帖趣意書』橋浦の担当した調査地と調査時期は次の通り。静岡県周智郡気多村（一九三四年）、高知則高岡郡檮原村・同沿岸地方（一九三四～三五年）、佐賀県東松浦郡厳木村（一九三五～三六年）、福井県大野郡五箇村（一九三六年）、山口県阿武郡嘉年村（一九三六年）、和歌山県和歌山市雑賀崎（一九三八年）、新潟県西蒲原郡間瀬村（一九三九年）。

⑭「どん底から立ち上がる村」（『旅と伝説』一九三四年十一月号）。のち橋浦の著書である『民俗採訪』（六人社　一九四三）の中に「笑へぬ山」と改題、加筆される。ここでは後者を引用した。

⑮　この指摘は一九八九年一〇月二〇日、筆者との談話の中であった。因に『五塵録』付録の年譜は竹内道夫氏と總子氏の共著である。

⑯「第三三回解放運動犠牲者合葬追悼会」（『解放の礎』　日本国民救援会　一九八〇年三月号）。これについては、一九八九年一〇月三一日、党広報部に御教示頂いた。なお、橋浦の入党が戦後である事を裏付ける事実として、一九三三年七月に消費組合の夏期講座期間中、検挙され、短期間拘留された時以来、橋浦は内務省の掣肘を個人的には受けていない（一九八九年一〇月二〇日、總子氏談）。

⑰『民間伝承』（民間伝承の会　一九三七年四月号）。皮肉な事に時勢とは離れた民俗学の枠内で同学同志との連帯を意図した、この橋浦の提案は同じマルキシストで民俗学者であった赤松啓介と対照的なものとなる。一九三八年二月『唯物論研究』に掲載された「民俗学最近の研究情勢と動向」の中で赤松は柳田の民俗学への立脚点を「小ブル的農本主義」と指摘した上で、これに組織された中央の研究会が「ますます地方研究者から離れた独占的研究をして遂に公然と派閥的研究たるを表明せしむるに至る」ことを非難するとともに「これ以上の発展のためには民俗学が小ブル的研究者の農民聞書たることを離れ、農民自身をして自らを研究せしめなければ期待できないまでに迫っ」た当時の日本民俗学の近況を「地方研究者の徐々たる質的転換」によって打開することを主張する。正に橋浦が提案した「縦の研究会組織」と対極的な地方研究者の独立した民俗学研究の連帯がここに説かれている。但し赤松のこの主張は中央と地方の研究者の間に階級的な区分がある事を強引に想定した観があり、その点では橋浦の提案は現況に即したものだったと言える。

第三章　実践的民俗学の萌芽——再び一九四六年の位置から

柳田は曾て「『赤はまだ直るが、白は絶対に駄目だ、狂信だからね』」（橋浦泰雄「先生」『文学』一九六一年一月号）と言っていた。この言葉は別に橋浦を狙って言ったものではないが、この背後には極端な日本主義者に比べ、マルキシストは柳田にとって、合理的な研鑽の期間を通れば、どこかで掬いあげられる部分があるという、言わば科学としての民俗学に対して柳田が抱いていた自信のようなものがある。

一九四六年十月五日、「日本民俗学講座」に於いて柳田の行った「現代科学と云ふこと」という講演は、一九三七年に彼が東北帝大で行った講義を改稿したものだが、この中で柳田は民俗学の持つ特質として「普遍性、実証性、現代性」の三つを掲げ、「始めの二つはおまけのやうなものである」とことわった上で、その〝現代の科学〟たる民俗学が「気楽な学問もあるものだといふような印象ばかり与へて、国の政治の是ぞといふ効果は挙げなかつた」ことを指摘している（『定本　柳田国男集』第二四巻　十一頁）。

この一九四六年にあって、「民俗学の現代性」を力説する柳田の内側には、戦時下の日本で当時の体制を正に民俗学の持っている「現代性」を踏み台にして批判することを意識的に避けて通ってきたことへの自省の念とともに、戦争中ついに使われる事なく終わった「民俗学の現代性」は、敗戦によってその効力を示す機会を失った訳ではなく、敗戦直後の現在の日本に対して、その「現代性」は発揮されなくてはならないという確信と決意がある。元々、農政官僚として出発した柳田は例えば「中農養成策」（『中央農事報』　全国農業会　一九〇四年一～四月号）に見る如く、その初期の論考の多くは常に「現代性」を帯びていた。そしてその後の民俗学への没入も、底辺に「経世済民」という強い規範があっての事であり、同時代の国民の生活改善を絶えず意識したものだった。

この柳田による「民俗学の現代性」の提起からやや遅れて、一九四七年九月の『民間伝承』の「巻頭言」に橋浦は「政治と民俗学」という一文を発表する。この中で今までかたくなに政治と民俗学の領分を区別し守ってきた橋浦は、ここでその双方の間に立って自身の考えを述べる。

終戦以来昨今迄、私は経済運動（協同組合活動）に関係していたので、政府当局と折衝する機会がおおかつた。終戦後の現在では米一合、味噌一匙と雖も、これを正当に手にするには、政治的な解決が必要だつたからである。此の二ヶ年間

にわたる度々の折衝を通じて、私が最も痛切に感じたことは、此の困難と苦悩に充ちた日本の現状を打開する為めに、行政し指導する任務を背負つた当路の人々（大臣始め上級官僚其他各種組織の指導的な地位にある人々）の大部分が、民族（大衆）の生活にうとく、且つその経路について殆ど無知に近いと云ふ点であつた。（中略）各国諸民族の生活実態（心意・物質両面にわたる）を総合的に対比研究する為めに、まづ自国民族のそれを探究することを目的としてゐる我々国内の民俗学徒は、我国の指導層に上記のような誤謬欠陥のあることを知つて、戦前からこれを指摘することに努め、殊に大戦中は極端な箝口令の中にあつても、これの指摘に努めて来たのであるが、一部の良識者を除く外の大多数は、極めて冷淡だつた。そしてこれが今日も尚続いて居るのである（「政治と民俗学」『民間伝承』一九四七年九月号）。

このように言い切る橋浦は既に四五年十月、再建された日本共産党に入党しており、その年内に東京都生活協同組合の理事長に選出されている。

今までに見てきたように明確な入党歴を持たず、一共産主義者として柳田に師事してきた橋浦を考える時、この敗戦直後の入党は戦後急速に勢力を得て拡大し続ける日本共産党に便乗したものではなく、橋浦自身の内部にそれだけの決意があったことが分かる。既に一九三〇年代後半から赤松啓介を先駆として、マルキシストの立場から階級変革を伴わない柳田民俗学に対する批判は、戦後になって堰を切ったように噴出する。その中にあって、あくまで民俗学者として柳田のもとに留まり、なおかつ新たに党籍を持つに到った橋浦の行動は、何よりこの時の彼の決意が確固としたものだった事を物語っている。

そしてこの打ち込み様は生活協同組合の方でも同様である。橋浦にとって協同組合運動への関与は、早くは柳田との出会いと前後した一九二五年に関東消費組合の理事となった頃に始まるが、同組合は例えば綱領の中に政治闘争への参加と無産階級戦線の統一を掲げるなど、ラディカルな政治運動としての性格が強かった（本位田祥男「消費組合活動」『協同組合の名著』第六巻 家の光協会 一九七一年 四四六頁 以下「消費組合活動」と略す）。これに対して戦後橋浦等によって創立された生活協同組合①は、まず第一に敗戦直後の窮乏した市民生活を救うための自治組織である事を中心に据えた政治理念よりも実際の切実な状況から出発した柔軟で現実的なものであった。一九四七年九月に上梓された橋浦の著『協合組合の育て方』（毎日新聞社 一九四七年）は何よりそうした組合の性格を伝えている。

……しかも今日では、生活必需物資の大部分が統制されていて、（中略）すべて政府の統制によつて、これが配給を左右されており、しかも、そこには依然として官僚の手に守られた不正が除去されず、（中略）民主自治のボツダム宣言には縁の遠い状態におかれており、従つて、これを最も秩序ある方法で人民の手にこの官僚的配給機構を移行せしめるには、この協同組合の組織を確立し、陣容を整えることによつてのみ、その実現を期せられるので、協同組合が単に昔日のように中間利潤を排除して生産者から消費者へ直接売買すればよろしいというような域を越えて、新しい国民組織の一つとならねばならぬ重大な任務をここに見なければならぬ（六頁）。

この様な橋浦の主張は再建された共産党が、その政策の劈頭に掲げた「食糧の人民管理」、「労働者よる産業管理」が現況とかみあわず、次第に色褪せていった時期を反映したものと言える。第一回参議院選挙に於ける事実上の敗北によって、共産党内でも政党枠を越えた市民運動として生活協同組合を重視する「新しい方針」（椎野悦朗　「生活協同組合運動について」『前衛』一九四七年九月号）は叫ばれていたが、実際民間ではそれに先立って生協運動は一定の成功をおさめていた。[2] 橋浦の叙述はこうした潮流を敏感に察知し、平易な言葉で運動が広範に行き渡ることを意図したものと言えよう。

このあと橋浦は具体的な組織方針に言及していくが、現状に即した眼差しは変わらず、この組合活動が広くいきわたることを念頭に置いた記述が続く。

これまでに都市に出来た生活協同組合の多くは、大体に一町内会、または数町内会を組織単位としたのであるが、この場合たいていは町会役員または町内の有力な人々によつて作られたものが多く（中略）そうした人々は多くは生活のゆたかな人々が多かつたり、あるいは、いわゆるボスとか親分とかいわれる人がおおく、そのような地位を利用して闇買いしたものを組合員に流すというような害悪を伴つたものが少くなく、どうも好ましいものが到つて少ないのである。（中略）組合の中心勢力としてあげなければならぬのは、やはり中産以下の、即ち町民大衆の中から町民の利益を守り得るような誠意と熱意のある人をだすことが必要で、（中略）その人が一見貧乏であつたり、あるいは失業してルンペン同様であつたりしても、やつぱり、そういう人達の誠意と熱意を尊重して、それを組合の中核的な分子とすることが必要である。現在の社会状勢の中で政治的な見解の正しさを見通し得る者は実にこうした人々の中から生まれてくることを無視してはな

らない（前掲書　五頁）。

マルキシストが消費組合活動に於ける階級的中立性を批判し、これを無産階級のみによって実現され得るものと規定するとの指摘（「消費組合活動」四一一頁）は、ここでも避けて通ることは出来ず、この橋浦の組織方針も旧来の有力者による弊害を意識するあまり、「十分に理解と誠意のある人であるならば、徒に排撃すべきでないことはもちろんであろう。但し、役員には入れぬ」（『協同組合の育て方』六頁）と、部分的に階級意識の入りこむ隙のあることは否めない。

しかし、狭義な政治的価値観を排し、まず眼前の生活を救うことを目的とした施策が、何より消費者たる市民の自治組織という形で試みられたという点を見逃してはならない。そしてそれは、相互扶助を当初の研究対象としたマルキシストが柳田の指導を経て、柳田の民俗学の根本にあった「経世済民」の思想を自身の領域に於いて実践したという点で、柳田民俗学の或る達成点をそこに見出すことはできないだろうか。

こうした橋浦の軌跡を見ていくと、柳田民俗学は特定の社会思想から離れた形で、現在目の前にある問題への対策探究に民俗学が関与するという、いわば〃方法としての学問〃の側面を持っている。橋浦の場合、それは様々な地域に残存していた村の自治組織を研究した経験が、戦後の消費者の自治組織を現実に即した実行可能な領域で設立、運営したこととして結実したと言えるのではないか。

もともと細部にわたる民間の生活習俗が足早に体系化されるのを好まなかった橋浦は自らも体系を作らず、採集してきたおびただしい資料の中から現在への視野を持とうとした。そして民俗学者としては柳田のもとに留まり、その弟子であることを終生誇りとした。この点に於いて、橋浦民俗学というものを柳田から独立して捉えることは難しい。しかし壮年期の柳田が日本民俗学の構築を志すにあたって、まずその根底に据えた〃民衆生活の幸福増進〃という課題は、その手段である生活習俗研究を経て、次の処方箋を探る段階に移った時、橋浦型の実践者の手に委ねられなければ、その研究価値を半ば失ってしまう。

この、柳田が民俗学に対して託した願望をマルキシストとして果たそうとした橋浦の行程は、晩年の柳田が難じることとなった〃研究のための民俗学〃に鋭い批判を投げかけている。

① 「生活協同組合」という名称は橋浦の発案による（『五鷹録』六頁）。

② 事例のひとつとして四七年三月一二日付の『アカハタ』には東京都北沢に於いて小学校給食実施のために教員組合、父兄会、婦人文化会と共に商店連合会を発起人に加えた協同組合が設立され、都長官の認可組合として軌道に乗った活動を展開していることが報じられている。

（京都大学大学院生　　）